



## 絵本『扉の国のチコ』 あとがき

私をはじめてチコと出会ったのは、もうだいぶまえのことです。絵のなかの少女チコは、黒い帽子をまぶかにかぶり、小さな望遠鏡を手にもっていました。「その望遠鏡で、なにを見るの？」と私がたずねると、チコはそれを片目にあて、こんなことをいいました。

「ほら、こうやって、もうひとつの世界を見るのよ。あそこへ行きたいなあ！」

チコがなぜいつも望遠鏡をもっているのかは、あとでわかりました。生まれつき目がふつうとちがいで、両目だと物がふたつに見えてしまうチコは、片目だけで見る望遠鏡が大好きで、そこにくっきりとのぞかれる遠くの光景を、もうひとつの世界として感じているのです。

そのことを知って、びっくり。私も生まれつきおなじような目をしていて、おなじように子どものころ、もうひとつの世界を夢みる癖がありましたから、チコとはすぐに友だちになれました。そして、ときにはチコといっしょに、あちこち旅をするようになったのです。

私をはじめて扉の国の入口に立ったのは、それよりもまえの一九七三年のある日、一通の手紙を受けとったときのこと

でした。瀧口修造という詩人の名前を記したその封筒のなかには『扉に鳥影』と題する小さな手作りの冊子が入っていました。それをひらくと、写真が貼ってあります。緑の木立のまえに、大きな油絵のキャンバスが立てかけられている写真。そしてそのキャンバスには、どこかで見たことのある木の扉と、そのまえにいる瀧口修造のうしろ姿が描かれていたのです。

まもなく西落合にある瀧口さんのお宅へ招ばれていき、あのオブジェたちのざわめく書齋に通されると、テーブルの上にもたおなじ写真がありました。病身の瀧口さんはそれについて熱心に語りました。亡くなった友人の芸術家マルセル・デュシヤンの展覧会を見に、思いきってアメリカへ旅立ったこと。フィラデルフィア美術館にのこされているそのデュシヤンの「遺作」の扉をまのあたりにし、そこにあけられているふたつの穴から、なかの不思議なオブジェたちの光景をのぞいてきたこと――。

そのときの瀧口修造のうしろ姿をうつした写真を、だれかが一〇〇号の大きな油絵に描いて、西落合のお宅へとどけてきたのだといえます。すばらしい絵でした。そんなプレゼントをした若い絵本画家のご夫妻こそ、中江嘉男さんと上野紀子さんなのでした。

私はその後におふたりの絵本『ペラペラの世界』（一九六六年）を見るにおよんで、なにかがひそかにつながっていることを感じました。チコをはじめて登場させたこの古い絵本には、小さなのぞき穴があり、最初のページには望遠鏡をのぞくチコと、その背後にある扉が描かれていたからです。十年近くあとにあらわれたあの『扉に鳥影』の油絵との関連を思いやると、とても不思議な気がしてきました。

やがて一九七八年になってから、ほかならぬ『扉の国』という題名をもった中江さんと上野さんの絵本が出版され、私はそれを瀧口家の書齋ではじめて見ました。扉の国へ行くのはチコではない男の子でしたが、その絵本にはなんと、なつかしいステッキをもつ瀧口修造その人が登場していたのです。デュシヤンのいわゆる「とざされていながら、ひらかれている」扉のまえに立って、男の子に謎々をかけているそのうしろ姿が、老いた瀧口さんの心をとらえていたようで、そのときも夜おそくまで、デュシヤンのことや、中江さんと上野さんのこと、そしていくどかの旅の想い出を語ってくれたものでした。

翌一九七九年の三月に、私は妻とヨーロッパへ旅立ちました。瀧口さんから出発まえに贈られたふたり用の「リパティ・パスポート」をもって、一年間ほどパリに住みました。そして七月一日、東京からの電話で、予想もしなかった知らせをうけたのです。私たちを長くはげましつづけてくれたいたかげがえのない先人、瀧口修造はその日に、七十五歳で亡くなったのです。

私は東京へもどってから、瀧口家の書齋で見つかった未発表の草稿のなかに、「遺言」と題する詩がふくまれていることを知りました。いちど重病をわずらったあと、一九七〇年七月に書かれたらしいこの手書きの草稿を見て、私は心をゆさぶられました。その詩は未完のようにも思えるけれど、瀧口修造の人々との出会い、さまざまな交友、シュルレアリスムの旅についての考えを汲みとれるような、文字どおりの「遺言」としても受けとれました。

しかもそこには、「扉」という言葉――それに、「こんどは二つの眼でほんとは見える」「もうひとつの國へ」という言葉がありました。私は心をゆさぶられながらも、この詩のなかに、なにか未知の人や物とのつながりを予感したように思ったのです。

私の中江さんと上野さんのご夫妻にはじめてお会いしたのは、それから二十年近くたった一九九七年のことでした。長いあいだ瀧口さんの想い出ばなしをし、それぞれの交友について語りあいました。そのときおふたりの準備していた「突然変異達」というグループ展のパンフレットの序文をもとめられ、私は「チコと望遠鏡」と題する一文を草しました。すでに親しんでいたチコと望遠鏡について、また瀧口修造の書齋やデュシヤンの「遺作」の扉について、どうしても書きとめておきたいと思ったからです。

二〇〇四年の末に、私は『封印された星 瀧口修造と日本のアーティストたち』という本を平凡社から出しましたが、そのなかに「チコと望遠鏡」も収録していました。三十年ほどまえから書きついできた瀧口修造についての文章と、瀧口修造を通じて（その没後もふくめて！）知りあった多くのアーティストたちについての文章を集めたこの本のために、自分では予期していなかったことですが、名古屋のC・スクエアで出版記念展がひらかれました。二十人をこえる芸術家たちのさまざまな作品にまじって、中江さんと上野さんによる一〇〇号の油絵――あの『扉に鳥影』の写真にうつっていた、

デュシャンの「遺作」をのぞきこむ瀧口修造のうしろ姿——や、『扉の国』のやはり瀧口修造の謎々をかける場面の原画も展示され、私は胸がいっぱいになりました。

ところでその前後、瀧口修造の生誕一〇〇年を記念する各所での展覧会のおりに、私はいくどか講演をしました。東京国立近代美術館での「旅」展で瀧口修造のシュルレアリスムの旅について語ってから、翌二〇〇五年の世田谷美術館での「瀧口修造 夢の漂流物」展の講演ではじめてあの「遺言」を引用し、つづく佐谷画廊主催の「瀧口修造とタケミヤ画廊」展のための講演でもおなじことをしました。それは「扉」や「もうひとつの國」について、ようやく語りたいたことがわかってきたからでした。

その二回の講演の会場には中江さんと上野さんも来ておられました。おそらくそれがきっかけになったのでしよう——半年ほどあとにおふたりから、絵本をいっしょにつくりましょう！ というお申し出をうけたとき、私は瀧口修造をめぐるさまざまな出会いの不思議を想い、よろこんでお引きうけたのでした。

絵本の各ページの絵柄のプランはすでに用意されていたので、私の役割はそれにあわせて物語をつくることでした。おふたりは、「どきどき」するといっておられました。こちらもおなじでした。原画は油彩ですから、こちらのつくる物語にあわせてすこしずつ手が加わり、絵柄のかわることもあります。その間にまた文章のほうもすこしずつ直していく過程が楽しく、その作業はいまもつづいています。

後半の絵柄について、どうしてもあの「遺言」が頭にうかんでしまう——と、ある日おふたりはいわれました。私も同様でした。そこでその全文を、地の文のなかに組みにいれることにしたのです。この『扉の国のチコ』の最後のふたこまに対応して、タイトルなしで引用される手紙の文章こそ、草稿のとおり「遺言」そのもの（これを収録したみすず書房の『コレクション瀧口修造1』では、なぜか題名も、組み方や文字づかいも多少ちがっています）なのです。

そのほか、瀧口家の庭にあったあのオリヴの木や「セラヴィー農場製」の塚づめ、書斎で語りあうオブジェたち、紙をこがすバート・ドローイングをほどこされた本、チェス盤を見おろすデュシャン、アリスの兎、フィラデルフィア美術館にある「大ガラス」や「遺作」、「フレッシュ・ウイドー」の青いフレンチ・ウインドー（フランス窓）、そして最後にあ

らわれる人物たちなど、写真や実物をもとに描かれた絵のページについては、どれも物語のなかで自立していますので、あらためて説明するまでもないでしょう。

ほんとうのところ、人と人ばかりでなく、人と物、物と物の偶然の出会いから、この本の絵も文も出発している以上、ここにはさまざまな想い出が読みこまれてもいるのです。

瀧口修造が亡くなってもう二十七年もたっているのに、いまでも「扉」をめぐる不思議な何かがつづいています。今年二月末から三月にかけて、京橋のギャラリー椿でもういちど「封印された星」展がひらかれたこともそうですが、そのあと、ほかならこの『扉の国のチコ』の出版を記念して、六月の後半に、生前の瀧口さんと縁のふかかった銀座の青木画廊で「絵本『扉の国のチコ』展」がひらかれるということも、私にとって大きな喜びであり、また大きな驚きでもあります。

もちろんこの絵本『扉の国のチコ』は、独立したひとつの作品として描かれ、書かれています。けれどもそれをめぐっておこる（読者とのあいだにも！）さまざまな出来事が、瀧口修造との出会いにはじまり、瀧口修造との出会いに捧げられるものであることはいまでもありません。私はいま「どきどき」しながら、それらの出来事を待ちうけているところです。

二〇〇六年四月五日 巖谷國士



絵本『扉の国のチコ』より部分